

中岡成文監修・寺田俊郎編

## 『シリーズ臨床哲学 第5巻

### 哲学対話と教育』

大阪大学出版会、2021 年  
346 頁、2,300 円（税別）

哲学対話が教育現場で注目されるようになって久しい。特に近年では、学習指導要領において「主体的・対話的で深い学び」や「言語活動の充実」が前面に押し出されていることもあって、哲学対話への注目はますます高まっているように思われる。本書は、日本における哲学対話の実践を牽引してきた執筆者たちが、教育の場での活動を紹介し、哲学対話の教育的意義を考察した論集である。

「監修者のことば」と「はじめに」および「おわりに」を除いて、本書は大きく分けて4つの部分から成る。すなわち、①日本の教育における哲学対話のはじまりと展開について扱った序章、②教育機関における哲学対話を紹介する第1部、③教育機関以外での哲学対話を扱った第2部、④多様な実践を踏まえて、哲学対話と教育の関係について改めて考察する第3部である。

序章では、大阪大学大学院臨床哲学研究室出身で教員経験のある編者が、日本の教育現場において哲学対話がどのように開始され広がっていったのかを、自身の経験を振り返りながら紹介している。大阪大学大学院臨床哲学研究室は日本における哲学対話の源流の一つだが、同研究室での哲学対話に関わる活動は2000年ごろに遡り、その後多様な場に展開していったという。子どもの哲学との「出会い」から、教育現場でのさまざまな実践

へと展開していく編者個人の物語は、そのまま日本の教育における哲学対話の歴史の一部となっている。その意味で、序章での記述は、貴重な歴史資料でもあるといえるだろう。

第1部では、教育機関での哲学対話が紹介されている（第1章～第6章）。それぞれの実践が始められた文脈や位置づけ、規模、対話に参加する学習者の状況などはバラバラだが、いずれの実践も、学校で哲学対話を実践することの意義と特有の難しさに触れている。編者によれば、学校には「問いを封じあう文化がある」。第1部で紹介された哲学対話は、いずれもそうした文化のなかで試みられた実践であり、まさに「学校の内に学校の外をつくる」という挑戦であった。

続く第2部では、企業や地域のなかでの哲学対話を扱っている（第7章～第10章）。人が他者と共に学びあう場は、いわゆる教育機関には限定されない。第2部では「教育」がより広い意味でとらえ直され、哲学対話を通じて、大人たちが日々の暮らしから生まれた問いに向き合う姿が描きだされている。その記述を通じて気づかされるのは、真摯に問いをもち続け、対話を深めようとすることの「重み」である。哲学対話を「洗練された教授法」として理解したり、私たちの生にとって「贅沢品」であるかのように扱ったりするなら、哲学対話は重さとは無縁だろう。だが、第2部で紹介されていた活動（とりわけ原発禍の町での対話や、ある種の義務感から亡くなった戦友の話を繰り返す高齢者とのやりとり、ジェンダーをめぐる哲学対話での「ひどくショッキングな事件」といったエピソード）からは、哲学対話が一人ひとりの実存や社会が抱える諸々の問題と不可分につながっており、そうした「重み」を引き受け、分かちもつ営みだということを突きつけられたように感じた。それは危うさも含み込んでいるように思われるが、その危うさはおそらく私たちの生そのものがもつ危うさなのだろう。

第3部では、本書のタイトルにもなっている「哲学対話と教育」という主題について、2人の論者が考察を試みている。通常、書籍の最後は総括的な位置づけであり、一つの結論を導くことが多いと思うのだが、本書では必ずしもそのような構成にはなっていない、というよりもむしろ、執筆者の間での解釈や強調点の違いが自覚的に取り上げられているのが興味深い。2人の論者は、哲学対話には「目的」があるのかについて、一見すると正反対の立場をとっているように思えるのだが（第10章、第11章）、この点について当人たちがやりとりをした「往復書簡」が終章として取められている。

「おわりに」まで読み終えたとき、筆者は本書そのものがきわめて対話的な書籍であることに気づいた。第3部の構成は特に象徴的だが、本書のどのページを見ても、そこには（単なる知識や情報ではなく）執筆者自身の「言葉」が見出されたし、読者を哲学的思考に誘うような考察にあふれていた。本書の読了後も、哲学対話と教育の複雑な関係について、筆者のなかで明確な答えが出たわけではないが、それはより身近な問いになったように思われる。忙しい日常のなかで立ちどまって考える勇気を与えてくれる、そんな一冊である。

村松 灯（帝京大学講師）